

書僧贊筆

二



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4

仁加
門跡
卷



ん處ふ方うやせの人多くまよひを考へしに又大

きのものぞればへ

日書云古今集ノ前序の細字ハ経人の加筆也モ
あうす小歌學者の是と並之の書かへらりと
あそハあやまり生々たゞこの書のよみがえも
我國の書のよみがえも古く人の書かへ
一傍注ノ本文ふうすまじ新わらー神代卷も
こもさうまじ阿良木能く吟味されいぢま
たるものなき

日書云東吉語一卷白石先生の著もとうる柳國

の文あと憲量アシヤウをなうつてうりたゞんとぞされ
志シテく國クニを傳ツキてゆふやシタ

日書云論語何晏集解ハ是利學校シテイ出スル」
活字板ハカタ近年東涯ドウイの序シキにて板ハカタもハ舊本

あり

日書云設法明眼論セツガムイエンロン至德シテイ古子コノ能ヨリ本船去
日ヒよりちよとハ八百年後アフタ古傳コトツキ也

日書云俗傳ソトツキ詩集シジツと蕉墨行ハシモトヨウ蕉墨ハシモト維
摩マハ傳ツキ也マハツキ

日書云八幡恩重訓ハチバンンシウシン教本コウモン古平コハラフ也マハ四

郭コウあついつとアツイツト是中シマツ一決ハシマツ水广ミツヒロ續
往アヒト考アヒト古アヒト手アヒト此アヒト用アヒトいたアヒト本アヒト古アヒト形アヒト
模アヒトの書アヒトハ傳アヒト撰アヒト又アヒトれアヒト時アヒト代アヒトとアヒト小アヒト
よ便アヒト行アヒトうアヒト事アヒト事アヒト傳アヒト也アヒト此アヒト有アヒト
人アヒト之アヒト重アヒト富アヒト書アヒト也アヒト中アヒトらアヒト也アヒト

而済ひて今の中のせよつゝ。耳年七十卷りと
のうりそちうは京師の好ひの人にけよと偽携
て全部二百巻江戸へ出づる官儒などひよ和學
小者を人へ吟嘆りとひ假想よ持て京教
へゆくさうの京師よハ切る偽云の相者出て
せとあらうとほの景一禪金高源菴等よ全史別
本列傳は云計とりて義経の全圖へ添ひ上
まつりしやへ全史別本のまと同ひよやうとよ
その傍なかつまわざれだもか。ソツつて是

」と毎走る。學者出でたりと世教の
害を却一没下をせねりの軍隊類をもと益形其
片のあらじ却てちがふ害へ

日書云文徳天皇高祖ハ照章云敕令と本一物
て部の良秀苦云あふ偏集すりて史記すりて
極り本と云ふ天皇崩御のとくとふ天皇は一
竹の傳とありてさうの後事ふ春秋のせふ首
ニと書て訓点かく。如くねがちもけよと訓点
角のいふ向人をやうて語りきよもやう
う取春秋と云ふ年とよつて是れをせのまハ卅之

文德帝丙午年三十二

日書云ナ猶ニ既憲の撰と。本紀世紀ハ希代称
書なり。古國史ニ並て七國史とソヘニト。さ
く。御。御。御。御。御。御。御。平か。ノ。本。ニ。十
七。九。八。年。本。於。テ。至。ミ。セ。ナ。モ。ハ。四。千。六
卷。有。ト。シ。

共云本朝世紀の。シ。ハ。リ。寄。ク。ナ。ル。年。山

チ。聽。フ。曰。

西山乙日本史と撰。セ。ナ。ミ。付。此。世。紀。と。あ。ミ
附。シ。ミ。付。シ。ミ。付。シ。ミ。付。シ。ミ。付。シ。ミ。付。シ。

情。シ。ム。ヘ。ミ。シ。ム。シ。ム。シ。ム。シ。ム。シ。ム。シ。ム。
享。保。二。年。以。來。休。モ。古。シ。ム。シ。ム。シ。ム。シ。ム。シ。ム。
群。書。類。聚。中。小。平。朝。世。紀。序。篇。一。卷。と。收。し。ニ。年。モ
失。本。ナ。ム。ア。リ。今。世。上。小。本。朝。世。紀。ヒ。類。ト。ソ。序。欠
ミ。づ。ウ。ム。二。十。ニ。二。冊。ツ。ム。ク。是。外。紀。日。記。ヒ。村
利。ウ。ム。カ。ト。名。ヒ。世。紀。ウ。ム。テ。也。ホ。人。ヒ。ア。サ
山。シ。ム。の。ち。ム。ア。ム。ム。ハ。平。惟。季。ヒ。本。ヒ。ス。テ
ヒ。ソ。ム。シ。ム。シ。ム。シ。ム。シ。ム。シ。ム。

日書云律令格式ハ國事と。序。の。太。宝。財。主。御。國
の。律。ハ。唐。の。永。徵。律。と。斟。酌。ヒ。編。集。ナ。リ。律。の。ま

書ハかわくわうひては中京章任の金玉ま
中板のいな小けつと。申ふ希め。政事事め
之そ年か賀か信しん保ほ純じゅんやけ量りょうと得。文ぶん穆もく先生
へ移。たま。宮保中園墨くろ木き軒せん上じょう。まま
ここちこ。今いまの廣ひろの用もちえこと損益そん。偏へん。たま
けけ書の本もと書ハ種たきと。ももと。先さ椎しい字じ直ただ本もとの集
解せ二に十七じ卷まき清きよ原はらの夏なつ野の義ぎ解かい十じ卷まき夏なつ原はら兼かね良よの批
數かず考こう跋ば。格ハ法ハに格ハ。身み觀くわん格ハ延の嘉か武ぶ全ぜん部ぶ五ご十じ
是そあそ大だん古こ書ハかわくわうひたま。はは四よ部ぶ
の書ハ代だい跡あと。ああそそうう。ままたま。ああ。

中平秦せ村むらの貞永じやう令れい。四よ部ぶの書ハ。かくて法式
と手て。とと。明法めい林士りん法ハ。教誨きょうと種たね房ぼう。根
まで。根法ね文ふみ。よく。立た。下さ。ソソ。の
ソソ。かか。ふふ。下さ。それ。ああ。上じょう。王おう。事こと。
事こと。ソソ。下さ。ゆゆ。利家りきの法ハ。書ハ。とと。もも
と。う。よ。ま。う。と。と。建武けん令れい。延喜のと。た。の。ま。に。建
人じんの。心こころ。よ。と。と。と。文ふみ。と。な。う。と。と。
と。う。ま。う。と。と。と。と。和わ令れい。清原きよ直じ賢けん林りん。春はる。の。ま。立
ま。う。と。と。又。舞まい倉くらの。根法ね。小。か。と。と。と。直じ賢けんと。招ま。

日書云法仁式ハシノミツルモアキトシトモ皆書く
今之物より株學シラクガクナシ人ト和書と好チハ御人ハ
學文シラクモンリシテトニシテ兩損スシテナシ年一人皇五十
ニ代明誠天皇の古事記ハニムニ年中出見ハシタと法仁
式ハシノミツル云清和天皇の貞觀年マフ法仁式の帳面カウ
ナツテ吉りハシタとせ一候ハシタと減ハシタて古の
帳面カウとありハシタらシテ一候ハシタと貞觀式ハシノミツルト
ナシテ法仁式の帳面カウ候ハシタと法仁仕替ハシタ候ハシタと
キモツハシタとす法の明法家マヒガタの役ハシタの脚ハシタと
モハシタハシタハカ一帳面カウと法仁仕替ハシタ候ハシタ

帳の入目ハシタと支ハシタの支ハシタの用ハシタと
自記式ハシタと一ハシタとハ法仁式ハシノミツルと自記式ハシタと
ト即ハシタテ一千後人皇六十代院政事の延長年中
年も人ハシタと延長年ハシタ王室万世の諸書ハシタと古ハシタと位
モワヤシハシタとシテ一ハシタと自記式ハシタと
シテ法仁式ハシノミツル年一ハシタと延長式ハシタと偏集ハシタと
ト即ハシタテハ自記式ハシタと五古ハシタと年一ハシタと
シテ自記式ハシタの用ハシタと支ハシタとシテ延長式ハシタと
の支ハシタと支ハシタと法仁式ハシノミツル十二卷自記式ハシタと十二卷モ
トの用ハシタと支ハシタと延長式ハシタと支ハシタと
トの用ハシタと支ハシタと延長式ハシタと全般

五十巻ありとハ卷数多しむ御りて、こゝか字
たゞい改生で、毎年の書物を焼失する
事ある。被災多くつゝとも、之に先きのものも
ふけつゝ、代官師の人々の書と仍舊も、
こゝあきる年竟も、のよひ、儒書とお
とくそく博學な人ハ和書と多く、其生の
俗と布ふる、うるなくちがて和古と云ふ
如じく、人ハ半學なれは、是も、真偽と云ふ
ことあり、之の如き、西漢の書か
ちやうす支あん印

王文恪公文集亦秦明王肇著宋國復校本
は書の洋書ハ董其史の書

漢隱叢書八本は書清人接宋本所刻

世医得効方廿卷明正德中刊十九冊十一行二十
二字

は書ハ大字本小字本二品あり、小字本ニ種
トモセ小字本希能、そのうち、

東見北鉛録人見ト筆著

文本と云新古ハ考古の附の人物、多と似て
後手と云うとの言と古相ふ、了了否否の字

校書のあと署して支本と云へと以て是書板
て不出高師直の權柄よりつて於て至之其
後人知之

高麗の鄭玄周未貞伊与寺ヒ川不俊貞也研子俊
花園隱集ハ玄周ノ集之玄周事業ハ
金澤文庫内左傳の卷本世有中宗師光跋
金澤文庫ハ北條貞顯叶創也貞顯ハ金澤越前守
也

清原頼業見礼大學中庸編云是聖人書也其後末
子注始末日本道春口語

陽村集ハ終鮮の權近の集也
退溪集啓蒙傳該天命圓鏡ホの書朝鮮の李滉ウ
所作也

革韋劫文ハ日本の年号の改元と書く其と云
書ナシ

異端布疋ハ大明詹淩本東卿平編也

延湯社ハ東方拂家の社錦也

伏見院内記南院内所は不持也自古盤竹至太平

院之院立於社内

沙石集ハ重一の背子無住ノ他

於芥集洞院左大臣実源所作其云集ハ松

下巻集ハ文安中少卿作東華破衲有序

乙事根源ハ一乘薰良撰之

弘法大师帰朝の時王昌齡集持奉獻于嵯峨帝宇
諸物絶ハ辛活大納言隆國の御子り隆國ハ近藤
江子西宮左大臣高師子也

章演因書偏載北林園即是耶蘇牙惟

陡斯デウスト漢ノ耶穀ゼゾト漢也

馮若禎典徐必達共學耶蘇云

天學トワニ書ハ耶蘇牙惟天主實儀ハ利馮實

开化ノ文

百川學海の真本ハ唐本類書考小載モトシテ
此より向宗堂のソノノノノ則ち真本なり
鉢福ク宋本をもつて覆刻モトシテ然その他此
書目彙刻書わルヒニ所洞あリテ予新ハ利と
為シ徒の解而の傍也

都佐川蒲原郡乙村大日堂元亨教書云天平八年
南天竺の婆羅門僧正行基善處トシトシナカニア
ムシテヒキト建立モテナシムシトシムの解ヒ一
ロアマ康曆二年庚申十二月施主下野守平時寛

大檀那分立を宗吉と形取てあり。而法洞の充贊
一個大永四年甲申誕生。平家臣監真と號りて。是
大和の寺跡也。予は達ハ平忠盛の寄草も。そら
ちうが今ハ文才漫演にて薄らうけとハ信ふ
すましくふ信のむ。へり。ハ金峰寺。洪護院處
六月十二月橘广吉平忠良忠盛。院入。慈湖七年奉
而薄弟て形取て。よし。ちは。放源ふ。そく。よ
一形。又。淡文の天智枝。清の天智年中。ふ。北京の
左宗帝雍熙三年徐鉉。士林。一。唐許慎の淡文解
ふと。覆刻。一。形。徐鉉。枝。ふ。已。若。の本。ハ。ち。よ

ちうが。古刻。ふ。ち。よ。ハ。許。文。真。あ。

釋惠鎮和尚

初名吉水和尚。一名及快。前大僧正慈因改名。和

謐慈鎮

又法性寺圓白忠通云。男也。大和二年四月十五日
誕生延暦寺。六十二代坐主學。快法親王才子而任
山門坐主。四箇度也。後延暦院。嘉福元年九月二十
五日於東坂本大和庄。中島坊入寂。

墨苦抄六

開居友

拾玉集

二赤集内

釋親鸞上人

本額寺用山初名若松凡后鶴滿丸一名範宴

父大職冠鱗是公十八也孫皇太府吉大進有範子
也母對馬守義親女師幼額故有深度志時十九入

慈鎮和尚室在青山坐主雜養是少仍言君惠寬台教

達仁元年時年廿九喜源室上人牙法速修念佛法往去
水室為師事之改名焯室又改名善心時年三十又沒善
信以念佛門盡行歷行諸國二十五年又改名觀鷲
從其徒者不可勝計其餘稱閩東二十四輩者杜葉
日盛也自永元年歸法弘長二年十一月廿八日遷

化壽九十一

淨土和讚

高祖和讚

正信未和讚

正信偈

唯心鉢文意

未燈抄二

淨土文類

教行信證八

尊号銘文二

西方指南鉢六

恩光鉢

教行信證八

出入二門偈

念多舍別支証文

至德太子講式

真宗肝要義

禪道元禪師

永平寺開山

久我亞相通忠卿子也正治二年生幼時古者相曰
此兒骨奇秀目在重瞳不凡初建仁見景西后真志
二年入唐安貞二年歸朝後洞宗為祖也建長五年

八月廿八日寂壽五十四

永平錄

令和革清規

宝慶記

永平法語

正法眼毛隨聞記

立叢識圖

天保五年歲次乙巳伊豆州莊山領無れ村里人は
ツメ枝先さの田地よりくじ鳥の中から出づ

佛舍利の入るゝ羅一個その圍の主なる。浮か
はつゝりくるゝ事無く亦ふりまふ秘密をも銘と
形てあり。細まぢといふ事もことぢへ
うつてそ文

丈四寸三分七厘八分八厘

六角小文字形である

桔乐寺才三代長老善願上人
舍利龍社
先師大德法諱順恩俗姓藤原
建久幕府士卒加藤判官景康
孫也又加藤少郎其母又藤氏
文永二十一廿七誕生於安二
十六歲隨恩世大德出家受具
值興正善蓬桂別號云承事宗
敬海大守作成師万人歸顯宗
之行能一朝貴滿生之悲願旨
書僧元年八月十日辰冠薦坐

入寂俗年六十二夏萬四十二

字格ハ原の傳ナアモ

陸奥國十府のさと岩切村東光寺の山川子断碑
碑文は地名の松山トツ

妙け

華嚴如來成正覺時於其
身中普見一切衆生成正

嘉慶式年丁卯四月日 敬白

令の今すひてほそきものに倉庫廐牧医疾
け三令全闕令をもきて閏市令ハ單行ナリ天保
年中前田春満大人高漢才了左申小兒ノテ板
木立子でせよ云々

はゆるは直刻の書藉と手写し。所ととぞ
トシタニ 神祖の言ひとどりて出島へ

武經七書文庫古松とツル松の

群書治要

活字

日本書紀 活字

東船

活字

貝親政要 活字

孔子家語

附秦王奉祀孔子傳疏

活字

周易古注

重意本

活字

魏定公諫錄

活字上八部ハ豫河板

ちく書原本ハ金澤文庫の本なり

大菴一覽

玉露書ふ於文國初活本論義

活字

作行ノ武

憲廟

四書集注

大學大形本二種

林家汝西点

五經

單經和刻

周易本義

詩經集注

平氏歌

書經集注

日

詩書古版本

皇朝の書

隸出雲子

ヒト製

本一ノ領

一ノ領

古昔ハ領子と詩

經音注書

経音注

あも下小林家点

行ノ武

德廟

大經孟子考文補述 山井鼎著

度量考 祖孫著

東医宝鑑

普救類方 望三英著

太平和刻局方 望三英校

六論衍義 祖孫校 日少

明律 祖孫校

本朝軍器考并圖式

服忌令 大形本小

古文書ハソツリシ古刻小准ナリミ

廣惠湯急方

ちと古淮ナリキサキサ代ナリリトハ文革日
ナ盛ニ昌平學校の古舊板多クレハシマツ
キナシテナシナシナシナシナシナシナシナシ
ナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシ

尾州家古藏板

群書活要

魏定工諫錄 活字

紀州家古藏板

貞觀政要

水府家所藏稿

常山文集 筑云の筆也

扶桑拾葉集

古之二書ハ 由前へは出入のけひに諸侯へ
賜つて少も未買の品にてトナリ 番号のなすト

タヤ京の山川又古語つゝり。書林へ下
と被ハ

参考古年紀

日保元年法物錄

艸露録貫

新編纂倉志

花押巻

日候

洪武正韻

華冰文集

日談綺

三國華海全書

救氏妙藥集

古篆量鑑

拾遺續生傳

雞毛手記

惺寓文集

惺高文集ハ町板トモ是じテ先本出昇一七江
之け止シモ水府家校正ハ原本ナシ町本誤ミ
アミ水府本ハ十三冊ナシ町板ハ八冊ニ本數
セイノク

趙州家藏板

十三經注疏 易編詩出來

日技勸記 易編出來

蘆州活藏板

處形圖說

南山俗語考

會津侯藏板

詩經世本古義

日新館童子訓

日新館九經正文 詩書論漢孔傳孝經出來

玉山講義

三子傳信錄

二程活教錄

雲州侯藏板

延喜式

古今名物類聚

此版今書歸人少

阿州侯藏板

通鑑綱目

明於復月

宋名侯藏板

集古十種

通雅

山谷韻跋

未言錄

獨者集

花月艸紙

融通念佛傳卷

法帖石刻數品出泉

阿彌津侯藏板

及童家

資治通鑑 宋司馬溫公

牛山侯藏板

論語微集覽

徂徠

歷朝詩集

正侯

龜山侯藏板

叔平紀伊守

史徵 初二之出舉

新堯田侯藏板

儀礼傳通解

山崎魚詩書集注

附武向輯畧

佐倉侯藏板

塙田家

女誠和解

佐伯侯藏板

毛利家

圓藏知津

明智鷦

法華通義

大德

海國山

立種纂經

不知是高貴英殿
校卷十一

福山侯藏板

弘安本孝經

小田原侯藏板

大久保加賀守

貞親政要

竹篠山侯藏板

青山家

大學衍義補

通鑑學要

御注孝經

福知山候基板
朽木東

秦西興北圖說

古今泉貨鑑

古之諸侯方の花板ハおもい出でまつた
計多々ゆく。次第の順次とく。ハカタ。一タ
てか。

医学館房藏板

聖濟總錄 活字

千金翼方 元刻覆刻

成無忌注傷寒論 元板覆刻

病源候論

かの宗上書とて一承壁
黄蘗宗統錄

後水尾院龍雞和尙小戒
今の世うへ
快う。うへ。大德の僧あ。おと教。問あまづれ
ハ龍雞和尚の戒のうちよ高きひて明る
よ歟。迄小入見まづ。されハ歎感。うへ。教
りうて禁中の仕様出處之

皇朝類苑 一名宋朝類苑

敕令ありて宋板とよりて洞板海事小出焉り
字形ハ將軍家より追跡りて是書の多く上
麻沙書坊刊行たりてせひ所の本の麻沙本
にて洒本などこのあと通雅と麻沙ハ印本の
精也とある。閩板ハ麻沙のあくまでも麻沙も
閩板の祖ともいふ。

近衛殿古藏板

大康六典

法師井家古藏板

禁裏銅陽板三冊

黄葉板一切経 六千九百三十卷為冊二十九十
四冊百七十五函 價

全部内大般若經冊本六百卷と淳化八百
六十七函と減也

分類價録

般若部七百廿卷 價一メ四十分四分
宝積部百七十卷 日二百四十五分七分

大集部百四十卷 價二百二分三分

韋叢部二百廿卷 日三百十七分九分

涅槃部百卷 口一百四十四分五分

五大部外重訛四百廿卷 價六百六十分九分

草譯經二百九十卷 價四百十九分一分

阿含部二百八十卷 日四百四分六分

小乘草譯經三百九十九卷 價五百六十三分六分

宋元入藏諸大小乘經餘百二十卷 價百七十三

分四分

大乘律五十卷 價七十二分三分

小乘律四百八十卷 價六百九十三分六分

大乘論五百卷 價七百廿二分五分

小乘論七百卅卷 價一ノ五十四分八分

宋元後入藏諸論五十卷 價七十二分三分

西土聖賢撰集止土著述千七百卷 價二ノ四百

五十六分五分

大明僕入藏諸集北卷欠南花並足附五百七十卷
價八百廿三分七分

通計價

附千全部 大藏緣起 鏡眼送錄

宝洲語錄 三藏聖教目錄

全部銀箱價百五十文

每付價四十四文

以上

太川本治黃蘿山額引の價銀ナリ細目ハ至
教月歸め此ハ贊と日錄ニ本ウモ一本ハ舊經
小説もとえのうのうの一車ハ町本ナリけ本ナリ
南香園等小かづひ撰人註人名を示す町板の
方蘿板ナリ木版の舊經の表ナリトハ
まゝ候舊經のちりて和板ナリハ

正統石本銅人圖經上中下各刻都數一帖 全四部

拓本鍼灸圖經考多紀桂山先生

拓本銅人鍼灸圖經三卷係于明正統八年所重
刻首有英宗御製序及伏作則三圖十六字為二
行百六十行為一段五段為一卷每段之首各標
而分之別有都數一卷又為五段四邊皆有花艸
欄格今依此而攷其製蓋石板廣大余高六尺許
碑面每十四字斷為一行百六十行橫為一層凡
五層以為五段表裏刻之即為四卷意者石經之
設資便於覽誦撫拓尤不如尋常碑文就石面上

下書丹行可見唐開成石經而觀也今以拔樓板
正危本及徐三友重刊本剥製泐闕星間有鳥行
訛止膠頤夕不童一紙南程罷抑医家鴻宝也因
援引諸書作銅人經考一漏百大方之謂可不
免也

宋藝文志曰王惟一新鑄銅人胸亢鍼灸圖經三
卷鄭樵藝文志曰銅人胸亢鍼灸圖經三卷宋朝
翰林医官王惟一編修天聖中詔鍼艾之法鑄為
銅人式

王應麟玉海曰天聖鍼灸五年十月壬辰医官院

上所鑄胸亢銅人武二詔一置医官院一置大相
國寺仁湧殿先是上以鍼灸之法傳述不同命尚
藥奉御王惟一考明壹龜亢鍼灸之會鑄銅人式
纂集旧聞訂正龍謬為銅人胸亢鍼灸圖經三卷
至是上之摹印頒行翰林學士夏清為序

宋鄭升南の著ところの心史といつて書はれた
孟子入見て井中水かくもよつて今世小鍛玉
心史といふ細目ハ下すすすらまゝまゝまゝ
姑蘇史より

咸淳集一

大義集一

中興集二

文書一

羅文一

大義墨序一

后編

五編

正學摩醯首羅天王療一切病咒附刻自行傳一

开載姑蘇志

則今世小出で寫本にて傳へ

清姚首源云宋搨帖跋法

懷仁聖教序 以首行晉字斷為跋

歐陽真木體泉銘 以左右二字補鑿痕為跋

顏平原爭坐位藁以輒有州對四字清楚為跋
智永千字本以後有姪方鋼摹四字為跋
共云虽不有宋搨本以有跋為佳矣

身延寺文庫の墨書印以日蓮上人の藏書ナリ日
起上人の詩文

伊勢の相吉荒木田某の女の書ナリ。池の藻屑
ナニ冊ありては書ハ三鏡のあくと云ナリ。此
経史也又如何。似て月の川井シツヒの書
ハ安徳帝の史也又如何。かかうと之打其も
字ゆうて得ム

下河辺先生大人の自ト譯古一ト松本小出来
ハ万葉名寄五冊洋水和歌集二冊曾丹集一冊以
上之部ナリトシ小板木焼ラシテ今付モルハ松
洞燭明燈ト自筆板下ナリト書の板もノミナシ
付ヘテモ、碧冲師の自筆の夢語膳四冊今上
板一トセハ付ヘテ是ハ御手写の花板ナリテ元
格のあく町板の方ハ四邊小板のう。本ヘがて
ニ種板木出来ヘト自筆本ナ

絆帖十二帖高小奉教絆帖川暮勤上石ト書ヘハ桂
竹高小絆帖と題トの蓋ト絆帖モ達人

法名と絆帖ハ假ト玉烟堂法帖二十四帖と
ニ見ム絆帖トあはレ絆トの題トのもの假ト
ナシム高小玉烟堂摹勒上石ト行ハもの真本トモ
極一テ法帖ハ高ト題書ナシガシトの体裁
ナシム

傷寒論集注ハニ本トモ一本ハ張志終著ト行ハ
一本ハ舒詔著トそのうちナシ張本ハ高ト題書ナシム
ナシム舒本ハ再重計ナシ計トナシム杜撰ナシの書
ナシムこのうトハ傷寒輯義支紀桂小ト行ハ
ナシム

真寶方法帖三帖為合一帖有明第一刻也

上鐘繇薦闈內侯直表

下羲之袁生帖

下自羲之至汝安侯志六人書牘

閣帖考正曰清王樹枏以後亂燬於火更勒一遂有大前大後之別清王樹枏以李直袁袁秦第一跋第十一兩行倒置者為大前本末則前後兩本無差別也

右原刻覆刻欵譖

宋陳振孫書錄解題曰今存行草本

